

マルクスの理論の本質

だが、マルクスは、彼の理論が「その本質上、批判的(注1)、かつ革命的である」〔『資本論』第一巻、第二版へのあとがき、18ページ〕点に、この理論の全価値があると考えていた。そして事実、こののちにあげた特性は完全に、また無条件に**マルクス主義**に固有のものである。なぜなら、この理論は、近代社会におけるいっさいの形態の敵対と搾取を暴露し、それらの形態の進化をあとづけ、それらが経過的な性格のもので他の形態への転化が不可避であることを証明し、**こうして、プロレタリアートにできるだけすみやかに、また、できるだけ容易にあらゆる搾取を清算させるために、プロレタリアートに奉仕することを、自己の任務としてはっきり提起しているからである。**あらゆる国の社会主義者をこの理論に引きつけている打ちかちがたい魅力は、まさにこの理論が厳格な、最高度の科学性（それは社会科学の最新の達成である）と革命性とを結合しており、しかも、偶然的にではなく、たんにこの学説の創始者が学者の資質と革命家の資質とをその一身に結合していたからだけではなく、理論そのもののうちに、内的に、かつ不可分にそれを結合していることにある。実際、ここでは理論の任務、科学の目標は、現実におこなわれている被抑圧階級の経済闘争において彼らをたすけることに、はっきりとおかれている。

(注1)マルクスがここで言っているのは、唯物論的な批判——彼は、このような批判だけを科学的な批判と考えている——のことだということを注意されたい。すなわち、それは、政治＝法律上、社会上、日常生活上、等々の事実を経済に、生産関係の制度に、また、あらゆる敵対的な社会関係を基盤として不可避免的に形成される諸階級の利害に照合する批判である。ロシアの社会関係が敵対的な関係であることは、おそらく疑うものはなかったであろう。しかし、**このような批判の基礎に、この関係を取りあげようと試みたものは、かつて一人もいなかった。**

「われわれは世界にむかって言いほさない、——君の闘争をやめよ、それはつまらないものだ、と。われわれはただ、世界に真の闘争の合言葉をあたえるだけである。」

〔本書、184ページ参照、1843年ルーゲにあてたマルクスの手紙〕

したがって、マルクスによれば、科学の直接の任務は、真の闘争の合言葉をあたえることである。すなわち、この闘争を、生産関係の一定の制度の産物として客観的に表示する能力をもつこと、この闘争の必然性、その内容、発展行程と発展の条件を理解する能力をもつことである。「闘争の合言葉」をあたえることは、闘争の一般的性格、その一般的目標——いっさいの搾取といっさいの抑圧とを完全に、かつ終局的に廃絶すること——を見うしなわず、しかも当面の各瞬間に情勢を規定することのできるように、この闘争の各個の形態をきわめて詳細に研究し、この闘争が一つの形態から他の形態へ移行していく一歩一歩をあとづけることなしには、不可能である。

試みに、「わが国の高名な」エヌ・カ・ミハイロフスキーが彼の「批判」のなかで叙述して、それにむかってたたかった、あの味もそっけもないがらくたを、マルクスの「批判的、かつ革命的な」理論とくらべてみたまえ。そうすれば諸君は、「勤労階級の思想的代表者」をもって自任しながら、……「平板な一小圏」——わが政論家たちは、マルクスの理論から生命力のあるいっさいのものを抹消することによって、この理論をこのような平

板な「一小圈」に変えているのだ——にとどまっている人々が、どうして実際にありうるのかに、おどろくであろう。

試みに、この理論の要求と、同じようにまさしく勤労者の思想的代表者でありたいという願望から出発しているわがナロードニキの文献、すなわち一般にわが国の経済制度の、とりわけ農民の歴史と現状を論じている文献とを、くらべてみたまえ。そうすれば諸君は、悲惨を研究し描写し、この悲惨について説法するにとどまっていたこのような理論に、社会主義者たちがどうして満足することができたかに、おどろくであろう。農奴制度は、これこれの搾取、これこれの敵対的階級、これこれの政治上、法律上、等々の制度を生みだした一定の形態の経済組織としてではなく、——たんに地主の不法行為、農民にたいする不正としてえがかれている。農民改革は、特定の経済諸形態のあいだの衝突、特定の経済諸階級のあいだの衝突としてではなく、——きわめて善良な意図をもっていたにもかかわらず、あやまって「まちがった道をえらんできた」当局者の方策としてえがかれている。農民改革後のロシアは、真実の道からの偏向、勤労者の悲惨をともなった偏向としてえがかれ、これこれの発展をおこなう敵対的な生産関係の一定の制度としてはえがかれていない。

とはいえ、いまでは、この理論の信用の失墜は疑いない。そして、現在の知識水準のもとではマルクス主義のほかには革命的理論はありえないことを、ロシアの社会主義者が理解することが早ければ早いほど、また、理論的および実践的方面で、この理論をロシアに適用するために、彼らが全力をそそぐことが早ければ早いほど、——革命的活動の成功は、それだけ確実であり、急速であろう。

第一巻「人民の友」とはなにか P343~345

コメント

マルクスの理論は唯物史観を導きの糸としているので、科学性と革命性が結合されている。その「直接の任務は、真の闘争の合言葉をあたえること」であり、「真の闘争の合言葉をあたえる」とは、当面の情勢のもとでの闘争が「いっさいの搾取といっさいの抑圧とを完全に、かつ終局的に廃絶すること」と統一的にとらえられていなければならない、「悲惨を研究し描写し、この悲惨について説法するにとどまっていたこのような理論」であってはならない、ということである。

現代日本においても、「ルールなき資本主義」をただすと言って「真実の道からの偏向、勤労者の悲惨をともなった偏向」を是正することのみを唯一の目的とし、「この闘争を、生産関係の一定の制度の産物として客観的に表示する」こと、つまり、現在の状況を資本主義の矛盾の表れであることを分かり易く明確に暴露して労働者階級の自覚を高めることを忘れてはならない。このことをしっかり行うことが、**真の闘争の合言葉をあたえる**ことであり、**マルクスの理論の本質に基づいて行動することである。**